お口直しにおひとついかが？

魚ノ宮 善（うおのみや よし・女）
＊ 馬鹿正直で強がり。自分の顔の悪さを自覚しており、心の底では悲観している。必ず男がやる。

田前 力(まえだ りき・男)
＊ 自分のことを男前だと自覚している。面食いではあるが、顔の美醜で人に態度を変えることはしない。必ず男がやる。

鍋口／ころも(なべぐち・男)
＊ ガキっぽい、大人ぶった雰囲気が欲しい。男女どちらでも。

糸島 屯（いとしま じゅん・男）
＊男がやる。幼馴染が好き。

青木 心人（あおき しんと・男）
＊男女どちらでも。足の不自由な妻がいる。

林 友示（はやし ゆうじ・男）
＊男女どちらでも。妹と禁断の愛を育んでいる

紅屋（べにや・老人）
＊ 男女どちらでも。怪しげな感じを持ち、それでいて胡散臭くも感じる人間。よく街で見かけるような占い師のような見かけ。

めくらの君（めくらのきみ　女）
＊男女どちらでも。もしかしたら削るかも。

【大道具】
舞台上手に平べったい箱
舞台下手に道端で偶に見かけるような占い師がよく使うサイズの箱
舞台奥に障子
障子のさらに奥には直方体の箱（移動可能）。上に座って足がつかないくらいの高さが望ましい障子は絶対欲しい。激しく開閉するのでそれなりの強度が欲しい。

【衣裳】
着物が望ましい。
準備ができない場合は役全体で統一感が出ていればそれでいい。

【小道具】
刀（竹光）。木刀。口紅は数本必須。

【音響】
和を中心にしたテイスト（あえてはずすのもありかもしれない。要相談）。
刀がぶつかり合うところは音なしにするかも。
正直自分にはＭＥに対する知識が乏しいので、かなりの部分頼ることになるかも。

【照明】
刀を振るうシーンはストロボでやりたい（チャンバラ・殺陣っぽくは見せたくない）
善の内心の表現と場転を障子と照明の表現でやりたい。
障子越しにローホリの明かりを灯したい。
上手の箱にスポット。

【宣美・制作】
和を前面に押し出したいが固くはしたくない。
できることなら役者の名前と顔を覚えてもらいたい。

【舞台監督】
大道具の建て込みや運び込みの時間調節がかなりシビアになると予想される。
一年生にいろいろな役職を見てほしい。できることなら、各作業場を近くにしてほしい。
（おそらく大道具は無理）

【キャッチコピー的な物】
相変わらず、愛代わらず
他意はないうえ　他愛ない
救いなく　好く意なし

報われずとも 報いあり

・一人（一役）だけほぼ当て書き。
・台詞はいくつかの例外を除き完璧に覚えなくてもいい。ニュアンスで覚えて、残りの２０％は役作りの過程で埋めていく。
・大道具と衣裳にはかなりの無理を強いると予想される。
・新入生が入ってから一発目の公演であるため、役者に一年生が固まるかもしれない。
・話としては、小説、絵本、ドラマ、映画、漫画、舞台、どの媒体でもおかしくない話を意識して作った。だからこそ舞台でやりたい。演出、演技による他の媒体との違いを見せたい。
・主役は善だが、この話自体の目線は「善以外のだれか」。
・役者の力にかなり依存するはず。
・昔の時代背景に「今の価値観」を持ってほしいため、言葉を現代のものに近づけている。そこを言うのはなんか無粋な気がしたので、ＯＰであんな説明の仕方になっている。恐らくＯＰは変更する。
・シーンは恐らく大幅に付け足すことになる。
・新入部員の数によっては兼ね役を作るように書き直す可能性あり

舞台上手にスポットに照らされた善が立っている。顔は陰になって見えない。
客席に向かって一礼。

善　皆々様どうも初めまして。私、魚ノ宮 善と申します。魚の宮殿で喜ぶと書いて魚ノ宮 善と書きます。御年二十と一年(ひととせ)。小さな小さな商家の一人娘で御座いまして、世間のイロハの一節すら唱えることも儘ならず、どこへと出してもお恥ずかしい、ともすれば白痴と呼ばれても文句を言えないほどの世間知らずの御身で御座います。この物語は、そんな私が、身の程知らすにも身分違いの恋をしたことに端を発します。

下手にスポットに照らされた田前が立っている。

善　このお方、文武両道・眉目秀麗・質実剛健・気宇壮大、この世にある全ての誉め言葉を束ねても足りないくらいの才気あふれる御人。氏は田前、名は力。町で一番の二枚目で、町一番の商家の倅でありながら火消しの長をしております。道行く女子（おなご）がそろいもそろって振り返るような浮世離れしたお顔の持ち主。年端のいかぬ気娘たちが通過儀礼届かぬ恋として思いを馳せるのがこの町の恒例行事なのです。しかしながら彼のことを本当の意味で愛すような人はいません。そこいらを歩くような普通の女子、いや、もしかしたら一国一城の姫君にとってでさえも、彼は高根の花すぎるのです。もちろん、私も御多分に漏れずそのうちの一人だったのですが、とある事が切っ掛けで本当の意味での――所謂ガチ恋に落ちてしまったのです。こうなってしまえばもう手には負えません。常日頃の一挙手一投足における営みの度に、あの御人の顔が頭の片隅を過ります。世間一般の女子であれば、当たって砕けろの気持ちで破れかぶれでも告白するのでしょうが、私にはそれができないのです。それは何故か。(このあたりでＢＧＭフェードイン、ギターベースのメタルチックな曲調。歌入りの場合は洋楽が望ましい。和の雰囲気は無し。）私も彼の様に、顔が浮世離れしているのです。いえ、見苦しい言い回しはやめましょう。私はこの上ないほど

――――

善、強く一歩足踏みをする。この時、初めて善の顔が見える。

善　――――不細工なのでございます。

ＯＰ。
善と田前の出会い。

善が街中で転ぶ。周囲を歩く人々は彼女を無視し、一部の人は奇異の眼で見遣りながら転んだ彼女の横を通り過ぎていく。彼女は悲しい目をしている。
そんな中、田前が近づき手を差し伸べる。
善は呆然としながら手を取り、立たせてもらう。
善を立たせ平気そうだと思った田前、善の腰についた砂を払いその場を去る。
善は何が何だかわからないまま田前を行かせるが、なぜか衝動的に田前を呼び止めてしまう。自分の行動が解らないまま焦りながら感謝の言葉を投げかけた。
田前は慣れた様子で振り向きもせずそれに応え、そのまま歩いていく。
善、しばらく田前の背中をぼうっとしながら見つめ、徐に手を胸の前に持っていく。きっと無意識だ。我に返った彼女は自らの手の置きどころが変わっていることに気付く。その手をしばらく見つめた後に、彼女は何かに気付いた。それはきっと――――いや絶対に恋心だった。彼女は前（客席）を向く。その顔は、彼女が今までしたことのないような、無邪気な無邪気な、笑顔だった。

音楽を残しながら暗転。
暫くして客の集中が切れそうになったタイミングで、ＢＧＭフェードアウト。
暗転のまま、舞台の諸注意を役者が素の状態で行う。間が持たない場合は全員にスポット（多分無理）もしくは薄暗い照明で顔だけ見えないようにする。

○○　観劇上の諸注意。
△△　当劇場に置きまして、飲食・御喫煙は禁止となっております。
××　携帯電話、その他アラーム機能の付いた電気機器につきましては、電源をお切りになるようお願いします。
□□　上演中の私語はご遠慮ください。ただし、劇に対する笑い声、歓声、啜り泣きに関してはその限りではありません。
◇◇　許可されたもの以外での録音、録画機器の使用はお控えください。
◎◎　上演中、前傾姿勢での感激は、周囲のお客様の視界を妨げる原因となりますのでご注意ください。
▼▼　上演中非常灯は消灯します。地震などの災害が発生した場合は、周囲に待機しております係員が誘導しますので、有事の際は指示をよく聞いて、行動してください。係員とは（係員の特徴）ている人間です。
△△　今回の劇は脚本家の致命的な実力の欠如により、一度見ただけでは内容が理解できない可能性がございます。その場合は、〜〜（チケットを買える場所）にて、一般　＄＄円、学生　￥￥円でお買い求めできます。もう一度見に来てください。
○○　最後に、今回の劇は脚本家の致命的な実力の欠如により、時代考証を全く行っていません。普通に英語とか出てきます。アンケートには書かないでやってくださ

い。彼は打たれ弱いのです。

△△　関係者をシャウトします。

それぞれ、後援及びスタッフ（役者を含めて）叫ぶ。

□□　～～（名前）！！ 以上！！

○○　それでは、長らくお待たせしました！ 時代考証全くなし！ チャンバラチョンマゲ一切なしの時代劇！

全員　劇団～～、第～回公演「お口直しにおひとついかが」！ 開幕！！

障子が開き、その後ろにある箱にはころもが座っている。ころもの傍には木刀が一本寝かせられている。

そこは善の住む家の縁側。妄想の世界から現実へと帰ってきたのだ。

善　ということなの

ころも　長いよ！

善　あれでもまだ短いくらいよ。私の悩みを伝えるには

ころも　そうだとしても自己紹介とかは要らないだろ

善　気分よ気分

ころも　気分って…。こっちの気分も考えてほしいね

善　悪くはないでしょ？ 私とこうして話している間は仕事を休んでられるんだから

ころも　確かに、善と話してるのは楽でいいけど…。しょうもない恋愛話聞かされるこっちの気にもなってくれよ

善　しょうもない恋愛話ですって？

ころも　もしくは夢物語

善　きっと正夢よ

ころも　むこうからしちゃ悪夢だね。…だいたい、善だって言ってただろ。叶わない恋だって

善　奇跡が起きるかもしれないじゃない。私の意志なんて関係なしに

ころも　むこうの意志も関係ないのかよ

善　関係ないのよ。本当の奇跡の前には、自分の意志も相手の意志も

ころも　おいらの意志は関係ないのかよ…

善　え？ 今なにか言った？ ころも

ころも　別に～。…てかころもって呼ぶな！！

善　別にいいじゃない。
ころも　いやだね！
善　そんなこと言ったって。それ以外になんて呼べばいいのよ

善、ころもの隣に座る。
ころも、善が近すぎて照れる。

ころも　お、おいらには「鍋口」っていう立派な名前があるんだ！ それで呼べ！
善　それって氏（うじ）でしょ？
ころも　それの何が悪いってんだ。
善　親しい間柄の人は下の名前で呼びたいじゃない（可愛く）
ころも　・・・そ、そうか？ そこまで言うんなら、別に鍋口じゃなくてもいいけど
善　そ、ならよかった
ころも　にしても、「ころも」って言うのは勘弁してくれよ！ 布物屋で働いてるから「ころも」ってのは安直すぎだろ・・・
善　いいのよ安直で。覚えやすいでしょ。それにそっちの方が可愛いくて私は好きよ
ころも　す、好きって！・・・い、いくら善に好かれても、こんな子供っぽいのは嫌だよ。もっと大人っぽい奴にしてくれ
善　子供っぽいのが嫌って、あんた完全に子供でしょ・・・
ころも　子供じゃねえよ！！
善　子供じゃない。頭も悪いし、力も弱い。
ころも　はっ！ 最近は店のおやっさんに頼んで算術教えてもらってんだ！ 今なら大人がビックリするような計算だって簡単にでき――――
善　四足す五は
ころも　・・・（固まる）
善　十足す二は
ころも　・・・（舞台中央に行き、木刀で地面に何かを書く仕草）十をy、二をXとすると

――――

善　そんなに難しくないわよ。・・・二足す一は
ころも　・・・も、問題が簡単すぎるんだ！ もっと難しいのをだせ！
善　はあ、ルート五の三乗かける四十の立方は
ころも　十と三千百二十五の六乗根！
善　なんでわかんのよ！
ころも　な、賢いだろ？
善　・・・・・それでも普通の足し算ができないんじゃ意味ないじゃない。それに、大

人の男に必要なのは腕っぷしよ

ころも　は！ それをおいらに言うか！ おい善、おいらが一日に何回素振りをしてるか知ってるか！？

善　知らないわよ。百くらい？

ころも　ちっちっち。馬鹿にしないでくれたまえ

善　うわうざっ

ころも　耳をかっぽじってよく聞け！！ なんとその数百飛んで三十！

善　あんまり変わんないじゃない

ころも　全然違う！

善　同じよ

ころも　いいや違うね。全然、まったくもって。おい、善、こっちこいよ。三十の違いを見せてやる！

善、めんどくさそうにころものもとに行く

ころも、善が来てから木刀の切先を善に向ける

善　なに？

ころも　持て

善　はあ（木刀を握る）

ころも　毎日毎日、百三十回の素振りをして身に着けたおいらの剛腕みせてやる！ 今からお前を持ち上げるからな！ ふん！

ころも、善を持ち上げようとするが持ち上がらない

ころも　・・・あれ？ おかしいぞ？ ふん！ ふん！！（何度か持ち上げようとするが持ち上がらない）

善　全然力ないじゃない

ころも　なんで持ち上がらないんだ？

善　無理よ。諦めなさい。

ころも　ふん！ ふん！ ちくしょっ、なんで、こんなか細い女が、持ち上がらないんだ？

善　そんな、か細いなんて（照れて、木刀を持ったまま手を頬にあてる）

ころも　うお！（持ち上がる）

善　腕っぷしは全然上がらないくせに世辞の腕ばかり上がちゃって・・・（木刀を持ったまま手を振り回す）

ころも　うわうわっ！（振り回される）

善　まあでも、あんたはそのままでいいのよ？ まだまだ子供なんだから（柄を押し

付けながら）

ころも　ちょちょちょちょ（柄を押し付けられながら）、ちょ、つよいつよい、強いよ（木刀をひったくる）！ なんなんだよその馬鹿力！ おいら全く歯が立たないじゃないか！

ころも、言いながら縁側に座る。

ころも　はあ。その細腕のどこにそんな力があるん――

善、袖を捲る。ものごっつたくましい腕が覗く。

ころも　たくましい！？

善、裾を捲る。ものごっつたくましい太ももが見える。

ころも　足も！？

善　顔が悪いから、それ以外のところで精進しなきゃいけないの

善、言いながらころもの横に座る。

ころも　にしてもやりすぎだろ・・・

善　やってるうちに楽しくなっちゃって

ころも　普通そういうときって料理とか裁縫とかやるもんだろ

善　私ってそういうの苦手みたい

ころも　苦手って言っても限度があるだろ。料理なんて料亭の味とかを目指さなけりゃ、誰にでも作れるし

善　どうしても出来ないのよ

ころも　どうしてもって、そりゃ逃げだね。どうせちょっと失敗したくらいでできないとか言って――

善　爆発した

ころも　は？ 爆発？

善　サバとお味噌煮込んでたら。ボフンって

ころも　どう料理したらそうなんだよ！

善　さあ？

ころも　さあって・・・。じゃあ、裁縫は？

善　爆発した

ころも　どうやって！？
善　まつり縫いしてたら、こう・・ぼんって
ころも　・・・・・・（絶句）
善　ま、まあいいじゃない。料理なんてできなくても愛があれば。
ころも　・・・・・その愛ってのも疑わしいもんだけどね。
善　疑わしくなんてないわよ。相手のために尽くす愛。それを――――
ころも　尽くす愛ったって、料理も裁縫もできないくせに、言いたいどうやって尽くすって言うんだよ？
善　それはまだ考え中。でも、一つだけ決めてることがあるの。
ころも　決めてること？
善　あの人が返ってきてお迎えするときに言う文句よ。
ころも　そりゃあ、あれかい？『ご飯にする？お風呂にする？それとも――――ってやつかい？

善、舞台中央に移動し障子に背を向けたまま（客席に向かったまま）くずおれて座る。

善　そんなありふれたもんじゃないわよ。もっと素敵なやつ。まず、あの人が仕事から帰ってくるの。それも、とっても疲れて。

障子が閉じ、舞台上は善の妄想の世界になる。
時刻は夜。
再び障子が開く。そこには、仕事から帰ったばかりの田前がいる。

善　お帰りなさい。あなた。（色っぽく、自分に酔っているように）
田前　ただいま。いやー、今日は火事が三十件ぐらいあってね、大変だったよ。（障子を閉めながら）
善　疲れたでしょ？
田前　そりゃあもう。足が棒だよ。休む暇もなかったし。
善　喉が渇いたでしょう。
田前　ああ、おかげさまでカラカラだよ。

善、手招きをして田前を自分の前に来させる。

田前　どうしたんだい？

善、田前の肩を掴んで自分の方に引き寄せる。

善　　お口直しにおひとついかが？

善と田前、キス。長く、長く。
障子に満月を模した丸の照明が当たる。
善、肩を放す。

田前　　よし・・・・・すき～。
善　　あ・な・た～

今度は田前から善にキス。
善と田前がいる場所だけフェードで暗転。

明転。善の妄想から現実に戻ってくる。

善　　あ～（妄想のシーンからここまで息継ぎ無しで発声し続ける。）

善、未だ妄想に浸っているらしく空中に向かってキスをしている。
障子オープン。

ころも　あ～～～りえねえ！！
善　　あーんだめよー、落ち着いて――――
ころも　目覚ませ！ 気持ち悪い！
善　　もう、邪魔しないでよ。いま、いいところー

善、再び妄想の世界に行こうとする。
障子、閉ま――――
ろうとするが、ころもが手で防ぐ。

ころも　話を聞け！！ 戻ってこい！！
善　　あーんもう
ころも　あーんじゃねえよ！ さっきから！
善　　わかったわかったわよ。・・・で、なにか文句でも？
ころも　なんで開き直れんだ！
善　　妄想の世界は自由だもの。何か言われる筋合いはないわ
ころも　にしても無茶苦茶すぎるだろ！ 何だ火事が三十回って！ 絶対放火だよ！ そ

んでここら一体焼け野原で焦げ焦げだよ！

善　恋は焦がれるものよ。

ころも　少なくともそれは街じゃないだろ！

善　もう、無粋なんだから。

ころも　え？　ブス？

善　あ？

ころも　……いとかそう言うんじゃないだろ。おいらがあれをされたら全身にさぶいぼが立つね

善　そんなにおかしいかしら？　そりゃあ、設定に多少無理があったにしても、あの掛け合いは言うほど珍しいものじゃないでしょ。小説とかでよく見るし。

ころも　確かに、かけあい自体はそうでもねえけどさ……

善　なに？

ころも　それをやってるのがお前じゃん？

善　……何がいけないのよ？

ころも　……顔

善　あーあー！！　言ったわね！　ついに言っちゃったわね！　なんとなくそうとは思ってたけど！

ころも　なんで怒ってんだよ！　さっきから自分で言ってただろ！

善　自分で言うのと人から言われるのじゃ全然違うの！！……てめえぶっ殺してやる！！（縁側の上に行き、ころもに詰め寄る）

ころも　怒り過ぎだろ！！

善　それになあ！　あの人だって私の顔じゃなくて心根で愛してくれるに決まってる！！

ころも　てめえさっきまでと言ってることと違うじゃねえか！！

善　本音と建て前じゃあ！！

ころも　もうちょっとなりふりかまえよ！！

善　じゃかあしいわ！！

ころも　駄目だ会話が成り立たねえ！！

善　あの人はな、あの御人はな！　今頃私のことを考えてその気持ちでお腹がいっぱいのはずなの！

ころも　ありえねえって！！

障子、閉じる。

田前・糸島・青木・林が舞台下手からやってきて箱の周りでだべっている。

田前　お腹が一杯だ！ 米で！
糸島　ありえねえくらい食ったな。
林　食べ過ぎだよ。力は。
糸島　そうだぞ。米一俵分は食ったんじゃないか。
青木　店員さん引いてたよ
田前　全員で飯食うのが久しぶり過ぎて調子乗っちまった。
糸島　にしても食べ過ぎだろ。最終的に追い出されちまったじゃねえか
田前　話も途中だったのにひでえよな
青木　まあ、しょうがないんじゃない？ 店つぶす気かーって言ってたし
田前　もうちょっと食えた！！
青木　底なしだね。
林　なんの話してたんだっけ
糸島　あれだよほら、恋バナ。
田前　そだったそだった。恋バナだ恋バナ。で、どこら辺まで話したっけ？
糸島　なんだよ、忘れちまったのかよ。俺たちがめちゃくちゃ問い詰めてお前が
　　漸く話す気になった「めくらの君」の話だろ！
田前　冗談だって。覚えてるよ。話しゃあいんだろう。
糸島　さ、話せ。
田前　おうよ！ 貴賤群衆の老若男女。そこ行く道行く紳士淑女。耳の穴かっぽじって
　　よく聞け！ 刮目せよ！ 浮名轟く田前 力、一世一代の大恋愛を！
青木　僕たち以外誰もいないけど、うん！！
田前　……
青木　どうしたの？
田前　……不公平だ
糸島　は？
田前　俺だけ言わされるのは不公平だ！
青木　は！？
田前　お前らも話せよ！ 恋話！ 考えてみたらそうだ！ 俺が聞かれるばっかじゃね
　　えか！
糸島　なんだよ急に！
青木　あ！ 解った！ いざ話すとなって恥ずかしくなったんでしょ！？
田前　……いいから話せよ！ そしたら俺も話すから！
青木　図星だ。
糸島　って言っても俺たちの話なんて聞いたことあるだろ？
田前　それでもだ！

糸島　なんだよそれ…
田前　じゃあ糸島、そこの糸島 屯。お前からだ。
糸島　俺？ 俺かあ？ …まあ、話したことあるし別にいいけどよ。そんなに珍しい話じゃねえだろ？
青木　でも、屯の話って何回聞いてもいいと思うよ。なんかこう、胸にキュンっと来るっていうか。
田前　心人もそう言ってるんだ。ほら、話してくれよ！
糸島　そ、そうか…？ それなら、（咳払い）。お前らは勿論知ってるだろうが俺には今仲のいい女がいる。
田前　まどろっこしい言い方すんなよ。要は付き合ってんだろ。
糸島　まあ、そうだ。（照れて）
田前　照れんなよ。
青木　力が言うなよ。
糸島　（咳払い）まあ。今、力が言ったように俺には今。付き合ってる女がいる。
青木　うん。
糸島　（頷く）
田前　…いや、うん。
糸島　（頷く）
田前　…（頷く）
糸島　…（頷く）
青木　え！？ それだけ？
糸島　（頷く）
青木　いや、なんか他にもあったよね？ なんかこう、胸がキュンキュンするようなー。
糸島　（照れながら頷く）
田前　なんでさっきから全然喋らねえんだよ！ …そんでお前もちょっとは話せ。（林に向かって）
林　え？
田前　「え？」じゃねえよ！ 少しは喋れよ！！ なんで一人でたそがれてんだよ。
林　だって屯の話ってあれだろ？ 子供のころからずっと片思いしてた子に？ 綺麗な彼岸花がたっくさん咲いている河原でロマンチックな告白をしたって話だろ？ なんだっけ？ 「俺が死んだときは彼岸の花を添えてくれ。おあつらえ向きにここにこんだけ咲いてるんだ。ここの花がいい。ああ、そうだ。俺が死ぬ時だけ来るってのも面倒くさいだろ？ どうだ、俺が死ぬまで一緒にいないか？」だっけ？ 純情なことで。あーあーあー鳥肌が止まらない。なんだよ冬でもねえってのに。風邪ひいたらどうしてくれんだ。この人型ウイルス！
田前　今度は喋り過ぎだ！ 適度に喋れよ！ 適度に！！

林　はいはい。解りましたよ解りました。・・・じゃあせめて前より面白く喋れよ。どんだけ話が面白くても流石に二回目はちょっと飽きるだろ？

青木　まあ、そこは大丈夫でしょ。なんてったって屯だし。きっとめちゃくちゃ面白く話せると思うよ。いや決まってるよ。

林　・・・まあ、そうだな。なんてったって屯だしな。解った。俺もっと真剣に聞く。

田前　まあ、屯だしな！ さあ――――

三人　どうぞ。

糸島　話せるか！！

青木　えー、なんでー

糸島　話すこと全部先に言われてハードルをこれほどかってほど上げられたんだぞ！話せるわけないだろ！

田前　えーなんだよ。あーじゃあ次はお前だ、心人。お前が話せ。

青木　えー僕なの？ 別に友示でもいいじゃん。

田前　友示はトリだろ。

青木　えーなんで？

田前　なんでも何も、こいつの恋バナを聞いた後でお前自分の話できるか。

青木　あ、そうか・・・。

林　なんだよ話さないなら俺から――――

青木　ああ、いいよいいよ！ 僕が話すよ。

林　そ、そうか

青木　（咳払い）。じゃあ・・・って言っても、僕の話も屯と同じで何回もしたしなあ。

田前　そんなの気にしなくていいんだって。とりあえず話せよ。

林　心太の話ってあれだろ？ あしｇ――――

糸島　もうお前は黙ってろ！

青木　（咳払い）じゃあ話すね。僕には、屯と同じように仲がいい女の子がいるんだ。

田前　だからあれだろ？ 付き合ってるんだろ？ なんでお前らはそこらへんを恥ずかしがるんだよ。

青木　なんかこっぱずかしいんだよ！ 皆に面と向かって付き合ってるって言うのって。

糸島　そうそう、なんか改めて言うのってやけにむず痒いよな。

田前　けっ、なんだよ恥ずかしい恥ずかしいって。揃いも揃って男らしくねえ。漢ならズバッと言えってんだ。

糸島　お前が言うな！

林　別に俺は恥ずかしくは――――

糸島　黙ってろ！

青木　あーあーあーあーもうわかった話すから話すから！ えーっと、僕の恋愛相手の

話だよね？・・・って言っても、僕も糸島と同じで話したことあるしなぁ。
田前　早く言わないと、また友示に言われちまうぞ？
青木　んー。なんだろ？　でも僕の恋人って普通の人だよ？　足が不自由なだけで。
糸島　それだけで十分に珍しいだろ？
青木　でも、ほんとうにそれだけだよ？　足が不自由なだけ。それ以外は普通に恋人みたいなことしかしてないし。
林　あーじゃあ、あれだ。お前がその相手に惚れた経緯（いきさつ）を教えろよ。たしかそこらへんは聞いてなかったよな？
青木　経緯ったって・・・。そこらへんも普通だよ？　道で大変そうにしてたのを助けて、そっから知り合って話してくうちに、仲良くなっただけ。
糸島　好きになったきっかけは？
青木　うーん・・・最初は足が不自由でかわいそうだなあって思って。そっから優しくしてくうちに好きになっちゃってた。って感じ。
林　それもそれでなんか普通だな。なんかもっとこう、ないのか？
青木　普通って言われても・・・
林　なんかないか、面白くて普通じゃない話。・・・普通じゃない話と言えば・・・、俺だな！
田前　自分の話がしたいだけだろ？
林　俺の恋愛はそこの馬鹿二人と違ってめちゃくちゃ刺激的だからな！
糸島　あれだろ？　妹と駆け落ちして、勘当されたって話だろ？
林　なんで言うんだよ！
糸島　お前が言ったからだよ！
田前　友示の話は刺激的ってより禁忌的だな。
林　納得いかねえ。喋らせろよ！　俺に！
青木　話さなくていいって。
糸島　お前の話は生々しくて聴いてられないんだよ！
林　なんでだよ！
糸島　お前がいつも夜の情事の話までするからだよ！　誰もそこまで聞きたくねえよ！
林　そこまで話してこそだろうがよ！
青木　二人ともうるさいよ！　他の人の迷惑になるでしょ！
田前　そういえばもう結構時間たってるし、そろそろお開きにするか。
糸島　それもそうだな。それじゃあ――――っておい！　まだお前の話聞いてないだろ！？
田前　あれ？　そうだっけ？
青木　うわ、白々しい。

林　俺たちだって恥を忍んで言ったんだからお前も言えよ！
田前　自分の口で言ったの心太だけじゃねえか！！
青木　でも言ったのは事実なんだから、力も教えてよ！ 普段あんだけモテてるんだからさ、恋の話もそれなりのがあるんでしょ？
田前　・・・分かった。
糸島　漸く覚悟決まったか。
田前　・・・・・、（糸島を指差して）純真。
糸島　え？
田前　（青木を指差して）同情。
青木　なに？
田前　（林を指差して）禁断。
林　は？
田前　（溜息）。お前ら三人とも在り来たりすぎ。純粋。同情。禁断。どれもこれも三文小説で使い古されたような恋じゃねえか。
青木　・・・そこまで言うなら、力の恋ってのはどんななのさ。
田前　全部だよ。
青木　・・・は？
糸島　どういうことだよ。
田前　言葉のまんま。全部だよ全部。純粋で同情深くて禁断の恋を、俺はしてんの。
林　いったいどんなんなんだよ、その恋。ごちゃごちゃして想像つかねえ。
田前　北の国で戦があったの知ってるか？
青木　ああ、知ってる知ってる。確か一人のお姫様を取り合って大立ち回りしたやつでしょ？
糸島　あー。なんでも国が一つ滅んだらしいな。
林　傾国の美女とはよく言ったもんだぜ。
田前　そのお姫様と付き合ってる。
三人　はあ！？
田前　いやあ、命からがら逃げてきたところに偶然出会ってさ。目を怪我して逃げられなくなったから匿ってくれとか言うもんで。
糸島　「めくらの君」のめくらって、「盲目」の「めくら」だったのかよ！
田前　それ以外に何があんだよ。
青木　いや、そりゃそうだけど。・・・ていうか目が見えない人に「めくら」って、・・・あんまよくないんじゃないの？
林　思いっきり蔑称だしな。
田前　本人がそう呼べって言うんだからしょうがないだろ。本当は「君」ってのも付けられたくないらしいけど、さすがに「めくら」だけでは呼べねえし。

青木　へえ。なんで？
田前　北の方にいるときはかなりのわがまま娘だったらしくてな。目が見えなくなってからその辺りを卑下してんだよ。
林　へえ。
田前　そんなあいつの姿を見ていくうちに、いつの間にか同情の心が恋心に代わっていったってわけ。目が見えない女ってのもいいもんだぜ？ 俺のことを顔だで判断しねえし。
青木　あれ？ でも力がそんな女の子と歩いてるのなんて聞いたことないよ？ 目が見えてなくてそんなに美人なら噂になっててもおかしくないのに。というより力と一緒に居たらどんな女の人でも町中の噂になっててもおかしくなのに。
林　もしかして適当ぶっこいてんじゃねえのか？
糸島　え？
林　だってよ、おかしいじゃねえか。姫様が盲目になって性格もよくなってーって、どこぞのおとぎ話でも今時見ない話だぜ？
糸島　まあ、確かに。現実味はないな。
田前　はあ、お前らならそういうと思ってたよ。証拠なら見せてやろうか
青木　え？
田前　おーい。

障子の奥からめくらの君（めくらの）が出てくる。（マイムか実際にキャストを回すかは未定。本にはキャストを回すていで書いておく。）

めくらの　田前さん？ どこですか？
田前　ああ、ここだ。ここにいるぞ。
三人　……
田前　どうした？
糸島　いや…。
青木　美人過ぎるよ！！ え？ 何この人？ ほんとに人間？
林　天女の生まれ変わりみてえだ
めくらの　…田前さんの友人さんですよね？
三人　ああ、そうですよ。
めくらの　ふふふ。田前さんが言ってた通り。面白い人たちね。
田前　お前らに会いたいって聞かなくてな。苦労したんだぞ？ 周りにばれない様に連れてくるの。
めくらの　田前さんも乗り気だったじゃない？
田前　そうだったっけ。

田前とめくらの君、イチャイチャする。

糸島　あ、そうですか・・・ん？　おい。なんで恋人なのにお前のこと名字で呼んでるんだ？

田前　ああ。なんかちゃんと嫁ぐまでは下の名前を呼びたくないんだと。

糸島　へー、しっかりしてるんだな。

林　そんだけ身持ち固かったら色々と生殺しだろ？　あっちの方とか。

糸島　おい。

田前　だからさっきも言っただろ純情な恋愛だって。別にその辺りは求めてねーの。

林　はー。あんだけ街に浮名を轟かせてた田前　力さんがそん殊勝なことを言うとはな。そうとう惚れこんでるな。

青木　でもおかしいよ。やっぱり。こんなに美人ならやっぱり噂に名になってないと。

田前　それは・・・

めくらの　私が頼んでるんです。出かけるなら人が少ない夜にしてって。

田前　おい。

めくらの　いいんです。貴方の友達なんでしょう？　言わなきゃ。私と彼との馴れ初めは聞いたでしょ？　目を怪我してしまったって。

青木　う、うん。

めくらの　それで視力を失ってしまったんだけど、本当はそれだけじゃない。一緒に、目の周りの顔も切られてしまったの。

糸島　・・・でも、そんなふうには・・・。

めくらの　この包帯やけに大袈裟に巻いてるでしょ？　目の周りにおおきなバッテンができちゃったの。ふふっ、とっても不細工なよ？

田前　・・・。

めくらの　変よね。包帯に隠れてるから見えるわけないのに、周りの人たちから見られてる気がするの。怖くて夜の行燈の中でくらいしか歩けなくなっちゃった。私ね、こうなっちゃう前までは凄く美人だったのよ？

めくらの君、懐かしむように遠くを眺める。目は見えていない。

田前　・・・おい――――

めくらの　でも、もういいの。田前さんとお友達の話を聞いてて、外が楽しかったこと、思いだした。

めくらの君、眺めるのを止め。壇の上に上る

めくらの　田前さん。私もう帰るわ。今日は一人で。
田前　おい！
めくらの　大丈夫。夜に貴方と何回も通った道よ。
田前　・・・わかった。ちゃんと帰って来いよ？

めくらの君、舞台奥からはける

田前　・・・。
糸島　いい女だな。
田前　だろ？　手出すなよ。
糸島　俺にも先約がいる。
田前　・・・なんか変な雰囲気になっちまったな！　なんか話題を変えよう！
青木　えーっと。ああじゃあ、あの話は！？
田前　あの話？
林　ん？　そんなあったかあったか？
青木　あれだよあれ！　こないだまで街中で噂になってたやつ！
糸島　あー！！　あれか！
青木　そうそうあれあれ！
田前　なんの話だよ？
林　わかんねえ。
青木　ほらあれだよ！　力が街中でその・・・えーっと
糸島　あー・・・あんまり顔がよくない奴を助けたんだよ！
青木　・・・そうそう！　そんなに顔がよくない人！
林　・・・ああ！　あの不細工！！
青木・糸島　おい！！
糸島　もうちょっとオブラートに包んで言えよ！
林　事実だし。
青木　にしても・・・
田前　不細工・・・ああ！　魚ノ宮か！
糸島　不細工で気づくなよ！
青木　そうそう！　魚ノ宮！　たしか商家のところの一人娘だっけ？　力と一緒で。
田前　たしか、そうだったはずだな。家での付き合いは無いからうちとは関係のない店なんだろ。
青木　町中大わらわだったよ。一番の不細工と二枚目が付き合ったって。
田前　ただ転んでた奴を助けただけだよ。別になんてこともねえ。
青木　そんなことだろうとは思ってたけどさ。

林　にしてもあいつ、不細工だよな。
糸島　だからお前、少しはぼかせよ。…確かにそんなに上等な顔じゃねえけどよ。
林　いいだろ別に。
青木　いや、よくはないけど…。まあ、確かにあんまりいい顔ではないよね。
林　そうそう。あの〇〇〇〇な〇〇〇〇と〇〇〇〇。めちゃくちゃ〇〇〇〇じゃね？（〇〇の部分は善役の役者によって帰る）
田前　おい、あんまそういうこと大きな声で言うなよ。本人に聞かれるかもしれないだろ？
林　大丈夫だって。っていうかお前だって思うだろ？
田前　まあ、多少は思うけど…。せめて場所を変えようぜ。
林　ったく。しょうがねえな。
青木　しょうがないのは友示だよ。

四人、舞台中央奥の障子の前に移動。
陽気なＢＧＭオン。
四人は、善は不細工だという話で盛り上がっている。
障子の向こうに善（シルエット）が通りかかる。四人の話に耳を傾け、へこんで膝を抱える
四人、話に一区切りつけて解散する。
障子がゆっくりと開く。そこにはごっつへこんだ善が。

ＢＧＭ、フェードアウト。

善、センター奥から項垂れながらやってくる。

善　はあ、悲しい、悲しいわ。どうして私の顔はこんなに醜いのかしら。家族から厭われ、道行く人からは奇異の眼で見られ、友人も殆どいない。恋心を馳せた相手には、相手にもされない。……この間なんて———

拍子木を鳴らすように、障子を二回開閉。
回想。
上手側の箱の上に寝そべる。

善　ふぁ～あ、朝だ朝だ。あー、ねーむーいーふぁ～～。……だめだ全然眠気がとれねえ、顔洗お。（男っぽく）

桶の水面に映る自分の顔を見る。

善　うお！！ 化け物だ！

ひとしきり驚いてから、恐る恐るもう一度桶を覗き込む

善　ああ・・・・・なんだ自分の顔か。はあ・・・・・よし！

気を取り直して化粧台に向かう

善　うお！！ 化け物だ！

回想から戻る。

いつの間にか紅屋が下手側に来ている。街中で見かける占い師の感じ。

善　あれは、なんとも情けなかった。・・・・・ああ、神様、どうして私をこんな顔に作ったのでしょう。あと少しでもこの顔が丸くて鼻筋が通っていたら、私の人生も少しぐらい変わっていたのでしょうか

紅屋　変わりませんよ。貴方のその顔はその程度ではよくなりませんよ。

善　いやでも、少しくらいはあるでしょ。亡くなった私の母曰く、私の顔は言うほど不細工ではないらしいですし。

紅屋　なるほど母の曰くつきの顔と。

善　どんな耳してんのよ。――――てかあんた誰よ！！

紅屋　ああ、これはこれは申し訳ありません。お声が聞こえたもので、ついつい口をはさんでしまいました。

善　殆ど悪口だったじゃない。

紅屋　口に戸をたてられない性分でして。

善　・・・なんかあなたさっきから初対面のくせにやけに馴れ馴れしいわね。

紅屋　いやはや。

善　誉めてないのは見てわかるわよね！

紅屋　ところでお、お嬢さん？ 何か買っていかれませんか？

善　人の性別を疑問形で呼びかけておいてよくそんな感じでもの売れるわね。

紅屋　性分でして。

善　・・・はあ、何を売ってるの？

紅屋　真っ赤な紅で御座います。

善　またやけにニッチな商売してるのね。あいにく紅なら間に合ってるわよ。
紅屋　ままま、そう言わずに。ここいらでは売ってない、海の向こうの商品でございますよ。
善　海の向こうねえ。
紅屋　そうでございます。今貴女様の眼前にて整列しております商品どもは、遠路はるばる海を渡って貴方様に召していただくために参じたのです。
善　あら、お上手ね。
紅屋　私、これらの商品を扱って幾年も様々な街を巡り歩いてきました。目利きには自信があります。お嬢さん何か顔のことについてお悩みは。
善　見てわかるでしょ。全部よ。嫌味？
紅屋　ああ、いやいや。そういう意味ではございません。質問を変えましょう。お嬢さんはお嬢さんの顔をどのように見てほしいのですか？
善　どのようにって…、せめて殿方から恋の対象としてぐらいは見てほしいわよ。
紅屋　なるほど、なるほど。つまり、女としての魅力が欲しいと。
善　まあ。控えめな言い方を避けるなら、そうね。
紅屋　それなら丁度いいものが。

紅屋、台の下から口紅（棒状）を差し出す。

紅屋　これなどはどうでしょう。
善　なに？　これも紅なの？　珍しい形ね。
紅屋　一見珍妙に見えるこの紅。遠くは南蛮から取り寄せたものでして。普段はどうやって紅を引いております？
善　どうやってって…。お猪口に紅を落として、乾かしてから水で溶かして唇に塗る。別に普通よ。
紅屋　あらあらあら。それはまた手間のかかる。
善　なに？　いけない？
紅屋　乙女の朝は短いものです。四半刻ほどの時間の違いで、もっと可愛く、もっと綺麗に、もっと華麗に。はたまた、もっと拙く、もっと醜く、もっと不細工に。貴方の見てくれの美醜は変わってしまいます。
善　長ったらしいわね。結局何が言いたいの？
紅屋　あらあら、失礼。商売のこととなると、口の車が回り始めて止まらんのです。（咳払い）こちらの紅、南蛮の秘術によって作られた代物でして、その巧妙こそ先程私が述べました長ったらしい前口上の受け手となるのです。
善　だから――――
紅屋　もう少しで終わります。（咳払い）実はこの紅、水に溶かすことも猪口に落とす

こともなく、そのまま唇に塗ることができるのです。

善、期待外れといった顔。

紅屋　いちいちお猪口なんか出さなくても、いちいち水で溶かさなくても、この紅は使えますから、忙しい朝の時間を節約することができるのです。――――？　如何なさいました？

善　・・・長ったらしく語った割にはなんか、こう、肩透かしね。いくら時間を作っても元から魅力がないやつは魅力なんて出ないわよ。

紅屋　まだまだ感想を言うには早計ですよ。南蛮の秘術の粋（すい）を凝らしたこの紅は、人知とその理を超えた妖術をまとっているのです。

善　妖術？

紅屋　そう妖術。この紅、さっと唇にひと塗りすると、その口紅がついている間だけ、その者の魅力を幾重にも等倍するのです。

善　つまり、どういうこと？

紅屋　モテるのです。

善　え？

紅屋　モテるのです。モテにモテまくり、モテモテにモテ、モテがモテを呼ぶ。道行くナイスミドルたちがこぞって傍らの女子どもを道端にほっぽり出して貴女のそのおみ足に縋り付いてきましょう。

善　・・・・・・・

紅屋　どうかなされましたか？

善　・・・・・何を言うのかと思えば。魅力が増えるですって？　馬鹿らしい。そんなのがあるんだったら、そこら中美人だらけになるわ。

紅屋　それはここが日本が故にでございます。日の元に有りまするこの国においては、海を越えやってきた品物たちは日の目を浴びての商売ができませぬ。かくいう私もこの一本を持ち込むのが精いっぱいございました。事実、南蛮の地におりまする女子たちは、皆鼻が高く眼（まなこ）も円ら。絵にかいたような美しさであると聞きますよ。

善　そんなこと言われても信用できるわけないでしょう。・・・あなたさっきからえらく押すけど、毒でも塗ってあるんじゃないでしょうね。

紅屋　いえいえいえいえ、滅相もない滅相もない。そも、私が今日ここで偶然会った貴女に毒など盛る意味はないでしょうに。

善　・・・まあ、騙されてみるのも一興ね。話のタネにできるかもしれないわ。・・・いくら？

紅屋　三十両で御座います。

善　はい三十両ね――――三十両！？
紅屋　はい、三十両で御座います。
善　高過ぎよ！ 立派な日本刀が買えちゃうじゃない！
紅屋　しかし、この紅の力を考えるとそれだけの額で何もおかしくはないでしょう。
善　だから、そもそも私はその不思議な力のことを信じてないの。
紅屋　そうは言われましても、ものがものですし、一点モノですので
善　・・・さすがにそんな大金は払えないわよ。・・・帰るわね。
紅屋　ああ！ お待ちください！
善　さようなら。
紅屋　ちょっと！
善　・・・
紅屋　ちょっと！
善　・・・
紅屋　お待ちくださいませ見返り美人殿。
善　なに？
紅屋　解り易い御人（おひと）だ。・・・どうでしょう、効果が疑わしいのであれば、一度ばかりお試しで使ってみれば。
善　それっていいの？ 一点モノって言ってたじゃない
紅屋　少しくらい構いませんよ。
善　適当ね。

紅屋、善に口紅を渡す。

善　これ、どう使うの？
紅屋　ああ、まず頭のところに被せてある蓋を外します。
善　こ、こう？
紅屋　奥の方に真っ赤な塊があるでしょう？
善　・・・あるわね
紅屋　それが紅で御座います。
善　これを口に塗るのよね。・・・ 本当に大丈夫なの？
紅屋　先程から言っているではありませんか。何もおかしなことはしていないと。ああ、もちろん妖術は別ですよ。
善　・・・
紅屋　ささ、どうぞどうぞ。ぐいーっと。
善　酒じゃないんだから・・・。

善、口紅を塗ろうとする。
糸島、青木、林が話しながら上手から入ってくる。
善、途中で手を止め、三人に背を向ける。

紅屋　おや、如何なされましたか。
善　いや、ちょっと気まずくて。
紅屋　ああ、そうだそうだ。どうですか？ あの三人で試してみては？
善　は？
紅屋　会うと気まずいのでしょう？ ならちょうどいい。この紅の力を使ってあの人たちを退けてしまいましょう。
善　だから私は――――
青木　ねえ、あそこにいるのって。
糸島　あ、力が言ってたあの・・・顔の調子がよくねえやつじゃねえか。
青木　何してるんだろう。あの・・・顔があんまりよくない人。
糸島　なんか小汚え婆さんと話してるな。あの・・・顔があんまよくねえ奴。
林　おいそこの不細工。
青木・糸島おーい！
林　なんだよ
糸島　お前もうちょっと、こう・・・オブラートに包めよ！
林　別にいいじゃねえかよ。こういうのは早く認めて開き直った方がいいんだよ。
青木　そうかもしんないけどさあ。
林　で、何してんだ？ ・・・ああそうか。あんたこの間、田前って男に世話んなったろ？ おれらはそいつの友達で――――

善、意を決したように口紅を塗る。
ＳＥ（以降、このロ紅を塗る度にこのＳＥを使用）。
障子の裏のローホリが艶やかな色に点灯。

林　ん？ なんか今唇に塗って――――

善、林が話している傍らにゆっくりと振り向く。
恋に落ちるＳＥ
林、善の顔を見るや否や上手の平たい箱の上に移動。スポット。

林　な、なんて魅力的なんだ！ とても女とは思えないあのごつごつした顔つきがとても、とても美しく見える・・・！！ ・・・ビューティフォー・・・！

林、ゆっくりと這いつくばる。それに合わせてフェードでスポット暗転。

青木　はあ？　どうしたの友示？　（善の方を見ながら）流石にあの顔を綺麗とは――

――

青木、善の方へと振り向く。

恋に落ちるＳＥ。

青木、善の顔を見るや否や上手の平たい箱の上に移動。スポット。林の背中に片足を乗せる。

青木　な、なんて魅力的なんだ！　とても女の人とは思えないあのたくましい手がとても、とてもしなやかに見える・・・！！　エレガント・・・！

青木、ゆっくり這いつくばる。それに合わせてフェードでスポット暗転。

糸島　おいおい、何言ってんだよお前ら。冗談にしてはたちが悪いぞ。さっき惚れてる女の話をしたばっかりだろ？　そもそも、絶世の美人ならまだ話は分かるぞ？　でも、この・・・魚ノ宮だっけか？　は、あまりにも顔が――――

糸島、善の方へと振り向く。

恋に落ちるＳＥ。

糸島、善の子を見るや否や上手の平たい箱の上に移動。スポット。先にいる二人の上に乗る。

糸島　な、なんて魅力的なんだ！　明らかに女性とはかけ離れたあの筋骨隆々な体つきがとても、とても艶やかに見える・・・！　エロティック・・・！

善　・・・なんなのあの人たち！？

紅屋　だから先程申したではございませんか。南蛮の妖術でございますよ。

善　まさか本当だとは思わないじゃない。

紅屋　なにか一つ命令してごらんなさい。

善　命令たって・・・。じゃあ・・・全員、物まねしなさい

三人、それぞれ物まねをする。（変更の可能性あり）

善　凄い・・・！ 本当に私にメロメロになってる。
紅屋　・・さあ、これでこの紅の妖術。証明できたでございましょう？ ささ、どういたします？ こちらの紅――紅だと普通のものわからなくなった紛らわしいですね――こちらの「口紅」一本で３０両、お買い求めなされますか？
善　もちろん、買うわ！
紅屋　ああ、この口紅もともと自分に惚れている人間には効きませんから。お気をつけください。それと――――
善　ああ、大丈夫大丈夫。もともと私を好きになるような奴なんていないわよ。

善、口紅に集中していて話があまり耳に入っていない。
紅屋、無言で料金をせびる。
善は巾着ごと紅屋にお金を渡す。
ＢＧＭオン。
ＢＧＭの一番、善が三人にいろいろな命令を出している。
二番に入ったところで、フェードで音量が落ちる。
善、センターに移動。
障子が開く。そこにはころもが立っている。

ころも　最近、善の様子がおかしいんだ。やけにキップがよくなってるし、一緒に態度もでかくなってる。

林　善様、今日の貢ぎ物でございます。
善　はい、ご苦労様。あら、やけに少ないのね。
林　あっ、ああ、申し訳ありません。ここ最近入用なことが多くて・・・
善　はあ、もういいわ。・・・足揉んで。
林　え？
善　少なかった罰よ。私の足をマッサージをしなさい。
林　はい！！
青木　あっずるい！！
糸島　・・・（複雑な顔で善を見る）

ころも　そんでいつも変な三人組を引き連れて、そいつらに何かしら命令しては楽しそううにしてやがる。なんだよ。

善　もうマッサージはいいわ。・・・三人とも。三回回ってワンとなけ。

三人、三回回ってワンとなく。（面白く）

ころも　あーもう！！　いったいどうしちまったんだよ！　善のやつ！！　おいらとも、全然あってくれなくなったし。

ころも、善の方に駆け寄る。

ころも　おーい善！！

善　あら、ころも。久しぶりね

ころも　最近どうしたんだよ！　全然うちの店に来ないし・・・。たまには店に顔出せよ！

林　なんだお前！！　善様にため口なんか聞きやがって！

青木　生意気だよ！

糸島　お前らやめとけ・・・

ころも　なんだよお前ら！

善　私のファンよ！

ころも　ファン！？

善　私にほの字ってこと。

ころも　・・・は？　お前に？

善　ええ。

ころも　ハハハハハ！　絶対嘘じゃん！　どうせ、家のお手伝いさんかなんかだろ！？　お前変な見栄張んなよ！

善　・・・三人とも〇〇〇〇（無茶ぶり）。

ころも　は？

三人善、からの無茶振りにノリノリで完璧に答える。

ころも　なにしてんだよ！

善　ねえ御三方？　貴方たちは誰に惚れてるの？

林　善様です！

青木　善様です！

糸島　・・・（口籠る）

善　あら、どうしたの？

糸島　・・・いや、何でもありません。善様です！

ころも　・・・・・どういうことだよ？

善　だからさっきも言ったでしょ？　この三人は私のファン。何でも言うこと聞いてくれるの。漸く私の努力が報われたのね。町中の男たちが私にくぎ付けよ。

ころも　・・・
善　どうしたの、まだ信じられない？ 証拠なら今見せたでしょう？
ころも　す、すごいな！ お前みたいな顔が好きな物好きな奴が三人も出てくるなんて！
善　だーかーらー。物好きとかじゃないの。単純に私の魅力が認められるようになっただけ。
ころも　それが信じられないんだって！ それならまだ善の顔を好きって言ってくれる変なやつが三人出てきたって言う方が信用できるよ！
善　あら？ 三人だけじゃないわよ？ もっといっぱいいるわ。
ころも　は？

善、障子を開け、外に呼びかける。

善　ねえみんなー！！

外から大歓声が聞こえる。
「yeah!!!」

善　ね？
ころも　いすぎだよ！
善　だから言ったでしょ。いっぱいいるって。
ころも　にしてもだよ！ にしてもいすぎだよ！
善　まあなんにしても。私の話、少しは信じてくれたわよね？
ころも　・・・・いや、まあ。あんなもの見せられたら信じるしかないけどさ・・・。
善　私の努力がついに実ったのよ。
ころも　だから、にしてもだろ？ いくら何でも急すぎるだろ。
善　ころもは気付かない？ 私の魅力に？
ころも　魅力も何も・・・
善　ほら、ほら（ころもに向かってセクシーなポーズをとる）
ころも　うわっなんだよ気持ち悪い。
林　今気持ち悪いっていったか！ 善様のことを！

善、口紅を塗る。口紅のＳＥ。

善　ころも。（ポーズ）
ころも　だからなんだよ！！
善　もしかして、効かないの？

ころも　きく・・・ってなにが？
善　・・・ねえ、ころも三回回ってワンと鳴け。
ころも　やだよ！

善、何かに気付く。

善　ごめんなさいね、ころも。貴方の気持ちには応えられないわ。
ころも　は！？
善　私には心に決めた人がるの！！

善たち、下手にはける。

青木　あ！ちょっと善様――！？
林　待ってください！！

糸島、青木、林、下手からはける。

ころも　・・・なんなんだよ。もうちょっと話してくれたっていいだろ。

田前、上手から登場。誰かを探してるようだ。

田前　あ、そこのちっこいの
ころも　・・・
田前　おーい。
ころも　・・・
田前　・・・・・そこの男前。
ころも　・・・なに！？――って田前！！
田前　おお、俺のこと知ってんのか。
ころも　そ、そりゃあ、あんたは有名人だし。知らない人のが少ないだろ。
田前　知ってるならちょうどいい。ここいらで男の三人組見なかったか？
ころも　男の三人組って・・・。○○（役者のヴィジュアル）みたいなやつらのこと？
田前　そうそうそいつら！あいつら自分の恋人ほっぽり出して、最近碌に家にも帰ってねえみてでさ、ずっと探してんだよ。
ころも　え！？あの三人恋人いんの！？
田前　そりゃあ、いい年した男たちだ。恋人くらいいる。
ころも　いや、そりゃあそうなんだろうけどさ・・・。

田前　で、どこにいる？
ころも　え？
田前　その三人組だよ。知ってんだろ？
ころも　えー。あー。
田前　なんだよ。
ころも　いや、あの、三つ巴ってどう思う？
田前　は？・・・もういい、行くぞ。じゃあな。

田前、下手にはけようとする。

ころも　ああ、ちょっと
田前　あ？ すまねえが少し急いでんだ、用事なら後にしてくれ。
ころも　ちょっとだけ！ ちょっとだけだから。
田前　なんだよ。
ころも　魚ノ宮 善ってやつ知ってるか？
田前　魚ノ宮・・・。ああ、あの不細工な！ それがどうかしたのか？
ころも　あいつのことどう思う？
田前　どうって、別に・・・。あいつがどうかしたのか？
ころも　いや、何でもない・・・。
田前　あっそう・・・。それじゃあな。

田前、下手にはける。
ころも、トボトボしながら上手にはける。
善たち、中央奥から登場

林　善様、肩でも揉みましょうか！
青木　善様、お腹は空いていませんでしょうか！
糸島　・・・。
善　あら、ありがと。誉めてあげるわ。
林・青木 ありがたき幸せ！
善　屯？
糸島　は、はい。
善　さっきからずっと上の空ね。どうかしたの？
糸島　いえ、ちょっとばかしぼーっとしてしまって。
善　体でも悪くした？
糸島　いえ、体長はすこぶるいいんですが、どうも感情の整理がつかないというか。

善　気持ちの整理がつかない？
糸島　なんというか・・・、しばらく家に帰っていないので、ちょっとばかし家に置いてきた恋人のことが気になりまして
善　恋人？　あなたたち、恋人がいるの？

田前、舞台奥から登場。

田前　見つけたー！！
糸島　力！！？
田前　お前ら何してんだよ！！　何日も家に帰らねえで！　お前らの恋人めちゃくちゃ心配してたぞ！？
青木　ちょっと、用事があったんだよ。
田前　その用事ってのは恋人をほったらかしてまですることなのかよ！
青木　・・・大事な用事なんだよ！
糸島　・・・
林　善様に尽くしてるんだ。恋人に使う時間なんてねえよ。
糸島　おい。
田前　善様？　魚ノ宮のところのあいつか。なんであいつの名前が出てくんだよ。
林　俺たちは三人とも、善様に首ったけだってことだよ。
田前　は？
林　だーかーらー、恋人に使う時間なんてないんだって。
田前　おい、お前。自分が何言ってるか解ってんのか！

田前、林に掴みかかろうとする。

青木　ちょっと力！　やめなよ！　暴力は駄目だって！！
田前　放せよ！！
青木　駄目だって！
田前　お前も友示と同じなんだろ！　魚ノ宮ってやつに惚れこんでんだろ！！
青木　そうだけど・・・
田前　おい！　屯！　お前もそうなんだろ！！
糸島　・・・
田前　お前やっとかなったって言ってたじゃねえか！！　あれは嘘だったのかよ！！
善　あの
田前　ああ！？
善　田前様、どうか気持ちを抑えて――――

田前　てめえ・・・！ どの口が言ってやがる！！ どうせてめえが汚え手を使ってこいつらを抱え込んだんだろうが！
善　あの――――
田前　今すぐこいつらをもとに戻しやがれ！ おい！ おい！！
善　・・・

善、口紅をつける。
口紅のＳＥ

善　田前様、どうか落ち着いて。
田前　・・・あ？ これが落ち着いていられるかよ！！

善、もう一度口紅をつける。田前には聞かない。
何度やっても、田前には聞かない。
善、耐えきらなくなり、その場から逃げ出す。
田前、善を追いかけ、それに続く形で他の全員もハケる。

紅屋　はい。実はあの紅にはもうひとつ、聞かない人間の条件がございます。
それは、口紅を使った人間のことを心から憎んでいる人間。この口紅は、好意を数倍にするもの。ですので、そもそも好意が無いものにはかけらも通用しないのでございます。
ほら、だから全部話したでしょう？ だからその物騒なものを閉まってくださいな。よろしい。嘘つきだと申しましても。私の話をまともに聞かなかったのはあなたの方で御座いましょう。

善　ねえ、そこの三人。一つだけお願いがあるの。
林　はい！ 何でございましょう！
善　めくらの君を、殺してきてほしいの。
林　はい？
善　だから、あの御仁の恋人を殺してきてと言ってるのよ。
林　あの、いくら何でもそれは・・・！
青木　そうです。いくら善様のお願いだとしても、そんなことはできません。
善　ならいいわ。別のファンに頼むことにするわ

善　でも残念ね。
糸島　・・・残念というと？
善　残念と言ったら残念よ。あんなに美人なひと、殺される前にひどい目にあっちゃうのでしょうね。
青木　そんなまさか。あいつらも善様のファンですよ？ 別の女になびくわけが――――
善　あなた達だって、私のファンでけど、恋人のこと愛しているでしょう？
青木　っ・・・
林　・・・
糸島　・・・・・俺たちが、殺してきます。
林　おいっ！
青木　屯！
糸島　俺たちがやるほうが、ただ殺されるだけな分、いくらかましだろ？
善　あら、そうなの？ ありがとう。別のファンに頼む手間が省けるわ。
糸島　ただ一つだけ忠告を。
善　なに？
糸島　貴女のその口紅。俺たちには似合わなく見えるようになるかもしれません。
善　どこまで知ってるの？
糸島　・・・・・知っていても、抗えないのいには変わりありませんがね。

糸島、他二人を連れて、はける

めくらの君、舞台中央で座っている。
めくらの君、三人が入ってくるときの物音を田前のものだと思い、側に近寄る。
三人。躊躇しながら各々木刀を振り上げる。

※このシーンは陰影の演出に重きを置いて作りたい。
弱い光量の灯体（ハンドライトでもいいかも）を角度をつけずに障子の向こうに置き、不気味な影を作る。この演出がうまくいったら、台詞無しのマイム＆ＭＥ・ＳＥのみにする。難しそうであれば、台詞をつけて演出する。

棒で人を殴打する音だけが響く。
殴打の感覚がだんだんと長くなっていく。
三人のリズムはバラバラだが、曲の終わりに向かうにつれてだんだんと揃っていく。
最終的には、完全に揃い。三人がまるで一個体の生物のような動きになる。
その動きが最高潮に達したとき照明＆ＳＥ＆ＭＥをカットアウト

善、センター面。糸島・青木・林が、上手奥・センター奥・下手奥に立っている（三人のそれぞれの立ち位置は要相談）
三人とも表情は重い。

善　三人とも、ちゃんとあの女を殺してきた？
三人　…。
善　…どうしたの？ まさか失敗したん――
糸島　…無事、めくらの君を、殺してきました！
善　あら、そう。あの御人はどうだった。
糸島　…田前は剣の腕が立ちます。自分たちのような木刀を持っただけの素人では人がかりでも勝つことは難しいでしょう。ですので、殺す瞬間は、田前の目に留まらぬようにいたしました。あと一刻もしたら、あいつも気づくでしょう。
善　ってことは…。あの御人は、誰があの女を殺したのか知らないの。
林　はい、そ――
善　それじゃ意味ないじゃない！！

三人とも何も言えなくなる。
善、半狂乱。

善　それじゃ意味ないの！！ 私が命令して殺させたってことが！ 私が殺したって

ことが解らないと意味ないの！……ねえ。

青木　…はい！

善　今すぐあの御人に伝えてきなさい。あの女を殺すよう仕向けたのは私だって。しかし――――

林　行きなさい！！

善　……。

林・青木　……分かりました。

糸島

善、背を向けて障子の方に進んでいき、障子の真正面で立ち止まる。

善　三人とも。貴方たち家に恋人がいるわよね？

三人　！

善　なに？　気づいてないとでも思った？　ひどい人たちね。口では惚れてるなんて言って、家には恋人がいるなんて。

善、見えない様に口紅を塗る。
口紅のＳＥ。

善　三人とも、その恋人殺しなさい。

三人とも、驚愕の顔。

善　あの御人の家に行くついででいいから。

善、中央奥からはける。

三人とも、一歩前に進む
三人とも、自分の思い人のいる場所にいる。障子の向こうでローホリに明かりが灯る。

糸島　ただいま。すまんな。遅くなって。…ああ、ああ。ごめんな。こんなに待たせるのは、今日までだから。なあ、おま――――。は、はは。何だよ。先に食っといてくれりゃよかったのに。せっかくうまそうな飯なのに、すっかり冷えてら。

青木　なんだ。まだ起きてたの？　先に寝ててもよかったのに。ああ、いいよいいよ。

大丈夫。自分でするから…。…どう？ 足の痛みの具合は？ ああ、そうか。じゃあ、今度…、今度薬貰ってきてあげる。大丈夫大丈夫。火消しの稼ぎもあるし、こうやって君が内職してくれててるから余裕もある。安心して。

林　遅くなった。…いやいや、そんなことはないから。…あれだ、あれだよ。今日は遅くまで火消しの訓練があったから。そう。…いや別に隠し事なんかしてないよ。……そりゃあ、大変だけど。別に辛か無いさ。誰のためだから頑張れてると思ってるんだよ。…ああ。そうだな…。

三人、一瞬だけ殺すのをやめようかと考える。
口紅の音。
三人とも自分の中の矛盾に気付く。誰かを愛しながらも、その相手を殺そうとしてしまっているという矛盾に。それでも自分を止められない。相手を愛おしいと思う気持ちより、善の命令を聞かなければいけないという気持ちが勝ってしまうのだ。
三人とも、自分の感情が解らなくなる。殺さなければいけないという脅迫の感と、愛しさという湧いて出てくる感情がぐちゃぐちゃに混ざり合う。内心は半ば狂乱しながらも三人は相手との会話を続けていく

糸島　おい。いや、何でもない。……お前さ、俺たちが初めて会った時のこと覚えてるか？ ああ、そうだった。真っ赤で綺麗な彼岸花が馬鹿みてえにたくさん生えてた川で、俺たちは会ったんだ。懐かしいよな。昨日のことみてえだ。

糸島の話の途中でＭＥが入る。会話を続けていくうちに、殺さなければという脅迫観念が薄れていく。その気持ちに伴って障子奥のローホリの光が弱まっていく。

青木　そうそう！ あそこの角んところの薬屋。懐かしいなあ。痛み止めが切れて痛くてしょうがないって、でもお金が無いから薬が買えないって泣いてたよね。いた、いたた。ははは、別にからかってるわけじゃないって。あれから何年経っんだっけ。覚えてないや。楽しかったなあ。言わなくてもわかるでしょ？ 一緒にいれたからだよ。

林　もう、三年ぐらいになるな。いやいや。解るだろ。親父達のところから飛び出してきてからだよ。…後悔してないか？ …いや、もっと他のやり方があったんじゃないかって思うんだ。あのまま、親父達に隠れなｇ――――…そうか、そうだよな。…ありがとう。

糸島　なあ――
青木　ねえ――
林　あのさ――

三人とも、いよいよ殺す意思が消えそうになる。
障子が大きな音をたてて閉じる。
口紅の音。（ＭＥストップ）ローホリがピンク色に灯る。
三人とも絶望に落ちる。その顔は泣き出しそうにも苦しそうにも見える。
三人とも、手に小刀（マイムかありものかは用検討）を持つ。

縋るように。

糸島　すまんな。もうどうしようもないみたいだ。気でも違（たが）えちまったのか。もう、こうしなきゃどうにもなんねえ。なあ、頼むからさ。逃げてくれねえか。俺はもうどうあっても止まれる気がしねえ。だからさ。いますぐこの場所から逃げて、どっか遠くに行って。そこでいい男捕まえて。幸せになってくれねえか？

請うように

青木　ごめん。ごめんね。ごめんなさい。なんかね。体と頭と心がてんでちぐはぐでさ、言うことを聞かないんだ。さっきまで楽しく話してたのに。さっきまでみたいなのをずっと続けていたいと思うのに。もう終わらせようって、頭が勝手に考えちゃうんだ。ねえ、一つお願い。最後は僕を恨みながら逝ってくれない？そしたらさ、君の人生も、少しは綺麗に終わるでしょ？

怒ったふりをして。

林　なあ、なあ、何とか言えよ！！ 家族との縁を切らせて、こんな貧乏な生活させて！ お前の幸せ全部台無しにしたやつが、今度はその命まで奪おうとしてんだぞ！！ なあ！ なあ！！ ……俺はお前の兄でも恋人でもねえ。お前だって、お前だってただの・・・ただの暇つぶしだ。今からお前を殺すのはただの一人の極悪人だ！

雫の落ちるＳＥ。ピンクの色が薄くなる。
三人とも相手から何か言われている。

愛の言葉。許しの言葉。別れの言葉。
三人とも感情がぐちゃぐちゃになりながら小刀を掲げる。

糸島　　愛してる。
青木　　愛してる。
林　　愛してる。

ＭＥオン。
三人、小刀を振り下ろす。
振り下ろすのに合わせ、ローホリを残して暗転。
ローホリの色がピンクに戻り、その光は段々と強くなっていく（トーンではなく光量）。
障子が勢いよく閉まり、閉じる音と共に一瞬暗転。

バウンドするように扉が開く。障子に向かってスポット。
めくらの君センター面で死んでいる。
田苗、センター奥から襖を開けて登場
めくらの君が寝ているのかと側に近づく。

田前　　おい、寝てるのか。

田前、めくらの君の顔を、やさしい表情で覗き込む。しばらく見てからめくらの君の体を揺さぶる。

田前　　おい、夜は冷えるぞ？　もうちょっとあったかくしてから寝ろよ。おい？

田前、いよいよ異変を感じ、焦った様子でめくらの君の体を抱き上げる。その時、めくらの君の体についた血に気付く。

田前　　おい。おい！！　どうしたんだよ！！　なんだよこれ、なんなんだよ！　おい！！
　　め返事しろ！　おい！　おい！！！

田前、めくらの君の顔の包帯を外す。

田前　　…。

じっと見つめてから抱きしめる。

田前　　だれだ・・・、誰が殺した！！ 誰がこいつを！ こいつを・・・・・！

ローホリ、オン。糸島、林、青木のシルエットだけが見える。

田前　　・・・・・お前らか。お前らか！！

田前、障子に向かって半ば這いつくばるようにして進んでいく。障子がゆっくりと開きそこには刀が置いてある。その刀をひったくるようにして掴み、ゆっくり刀身を抜く。鞘を傍らに投げ捨て、徐に刀を振り上げる。暫く浅い呼吸を繰り返した後、思いっきり振り下ろす。その瞬間閉じていた障子が開き、ストロボを一瞬点灯。三人のシルエットが倒れる。ローホリだけ残して暗転。下手側のスポットがフェードで付き、そこにはころもがいる。

（＊このシーンは役者と話し合って随時作っていく。）

ころも　　善！！

ころもが叫んだ瞬間に上手側のスポットが点灯。

そこには善が立っている。

善　　あら、ころもじゃない。どうしたの？

ころも　　どうしたのじゃねえよ！ 田前の奴が、裸の刀もってこっちに向かって来てたぞしかも血まみれで！ いったい何したんだよ！

善　　血まみれってことは、あの三人・・・――――。そんなに大それたことはしてないわよ。

ころも　　だからいったい何を――――

善　　殺したの。

ころも　　は？

善　　だから、殺したの。あの御人の周りでうるさかった女を。

ころも　　おい、冗談でも言っていいことと悪いことが――――

善　　本当よ。私のファンに頼んで殺させたの。

ころも　　・・・・・なんでそんなことを。

善　　邪魔だったからよあの女が。

ころも　だからって…。

ころも、後に続く言葉が思いつかなくなり黙り込む。

善　きっと私はあの御人に殺されるでしょうね。

ころも　え？

善　当たり前でしょ？ あの御人にとって最愛の人を殺したんですもの。

ころも　じゃ、じゃあ今すぐ逃げようよ。

善　いやよ。

ころも　なんでだよ！ 今から殺されるって分かってるのに……。死にたいのかよ――

――

善　死にたいの。

ころも　は？

善　私は死にたいの。あの人に殺されて。

ころも　なんでそんな……。

善　私ね、もうあきらめたの。あの御人に愛されること。なんどもなんどもなんども考えたけど答えは出なかった。だからもういいやって。愛されるのとおんなじくらい強く思ってくれればいいやって。

ころも　……なあよし――

善　私ね、今までの人生の中で、今が一番幸せかもしれない。

ころも　…善。

善　どうしたの？

ころも　……それでもおいらは。善に生きていてほしいよ。

善　…

ころも　よしあの時言ったよな。奇跡は自分の意志とは関係なくやってくるって。

善　…

ころも　それなら、善が考えても出なかった答えなんて関係なしに、向こうかお善のことを思ってくれるかもしれないだろ。

善、やさしく微笑む。

善　…ありがとう。ころも。でもね、今の私はあの時とは違うのよ？ 魔法みたいな――妖術みたいな奇跡が起こったって。あの御人は私のことを愛してはくれないの。

ころも　……。

ころもにだけスポットを残し、善の方はフェードで暗転。
障子が開く。
田前、先程のシーンの続きの様な体制でそこに立っている

ころも　止まれ！！
田前　邪魔するのか
ころも　当たり前だ！
田前　どうしてだ。どうして守る。あんな女を
ころも　お前こそ、あいつを殺してなんになる
田前　憎いやつを殺すのに、憎い以外の理由がいるか
ころも　それでも――
田前　お前の番だ。お前はどうしてあの醜女を守る

田前、鞘を放り捨て刃をころもに向ける
ころも、木刀はを強く握りなおす

ころも　惚れてる女を守るのに、惚れてる以外の理由がいるか！
田前　…お前、名は？
ころも　鍋口だ。名は付けられる前に親が死んだ
田前　鍋口か。鍋口、俺は田前 力だ
ころも　知ってる

ころも、叫び声を上げながら木刀を振りかぶる。明らかに素人の動き。彼には剣の才能がなかった
田前、がら空きのころもの胴体を袈裟切り。
ころも、切られた場所を抑えながら蹲る。

田前　…苦しいか！ 痛いか！
ころも　……ハハ、恋の、苦しみとか嫉妬の痛みにゃ足りねえな
田前　…お前、弱いくせに強いんだな

田前、痛みに耐えて脂汗を浮かべるころもに歩み寄り、顔を覗き込む
ころもの髪を掴んで頭を擡（もた）げさせ、首筋に刃を当てる

田前　じゃあ、さよならだ。

田前が力を入れようとしたその時に、ころもが田前の首に噛みつく。

田前　っ――――！！

ころも　はは、苦しいか。痛いか

田前　…恨みの、苦しみと、失う痛みには及ばねえよ

ころも　…

田前　…

ころも　ざまあみろ。その傷じゃあと半刻も持たない

田前　…

田前、眼を見開いて下手側を見据えながらゆっくりと足を引きずるように歩く。ころもの話は聞こえていないようだ

左手で刺された場所を抑え、右手で刃が剥き出しの刀を引きずっている

ころも　動いたら早く死ぬぞ

田前　…

ころも　進む理由は、憎しみだけかよ

田前　…

ころも　あんた、強いのに、弱いんだな

田前　…

田前、下手にはける

ころも　……おいおい、まさかおいら、惚れた女のために死ぬのか。親も金も学もなくて、ゴミみたいなおいらが？　ハハ、ハハハハ！

ころも、ひとしきり笑った後深く息を吸い込み破顔する

笑いが収まるにつれてフェードでころもにスポットを当てる

ころも　…幸せだなあ

ころも、皮肉っぽく清々しい顔をしている。

障子が閉じる音に合わせて、暗転

音をたてて障子がはじける様に開く。そこには縁側に座っているころもがいた。彼は月を見上げており、何やら物憂げな顔をしている。その姿こそ見えないが、隣には善がいるようだ（マイム）
これはいつかの回想。二度と戻ることのない数多の幸せが豪厘（ごうり）の際だけ頭を過（よぎ）り、そのうちの一つを拾い上げているのだ。

ころも　なあ、善？ おいらさ。いつか一人前になったらさ、言いたいことがあるんだ。・・・？ へへへ、秘密だよ！ んふふ、だけどさだけどさ、これだけは言えぜ？ 絶対、絶対に、善はびっくりする。・・・なあ、善？ お前さ、もし、もしさあ。そんな面じゃなくて、・・・例えばすごく美人だったとしたらさあ、どうする？ ああ、いや違うから！ そういうことじゃないから！ なんとなくさ、あの田前の野郎を見てると、なんとなくそんなことを考えちまうんだ。俺があいつみたいな面で生まれたとして、あんな性格になってたのかって。きっとおいらはおいらだよ？ そこは変わらない。でも・・・なんかこう偶に不安になるんだ。

無音の音（静かな部屋にいるときに聞こえてくる空気が耳を撫でる音）がフェードで入る。（もしくは「Ｌｅｍｏｎ／米津玄師」のカラオケ（主旋律無し）Ｖｅｒを流す）音は段々と大きくなっていく。
ころも、善に何か言われる。（「Ｌｅｍｏｎ」の場合はここでサビが入るようにする）
きっととても素敵で、彼女の強さを表すような一言だろう。
この時、彼女は強かった。弱くても醜くても蔑まれても、苦しくても悲しくても辛くても、彼女は彼女として、美しかったのだ。
彼は一言もしゃべらず、相槌も打たない。

ころも　・・・善。善は、すごいな。とっても追いつけないや。

ころも、何かを深く考えている。
無音はいつの間にか大きくなっていき耳をつんざくほどになっている。

ころも　・・・きっとさ、善みたいになるってことが、おいらにとっての一人前になるってことなんだろうな。・・・なあ、善？ これからもいっしょ――――

たんっ。
障子がふたりの会話と無音を切り捨てた。その戸を閉じたのは善自身だ。

善、中央障子前で地面にしな垂れながら座り物思いに耽（ふけ）る。
髪は乱れ、着物もはだけている。口紅は曲がりくねり、まるで子供が書き殴ったようだ。
眼は焦点が合っておらず、唇は小刻みに震えている。

善　　はあ。もうすぐ、もうすぐあの御人がやってくる。ふふ、私のために、ためなのよ、私の。すごい、すごいわ、すごいの、町中のみんなが憧れるあの人が、私のために命を投げ打ってまでやってくる。

赤 or ピンクの照明を当てられた障子が鼓動のリズムで開閉を繰り返している。
心拍の鳴動、妄想と現実の明暗。

善　　口紅の力じゃない、自分の意志で。アア、アアア。考えてみたら，あの子も、あの男たちも、誰も本当に思ってなんかいなかった。アアア、アア。あの御人は今まさに、ここにやってこようとしている。刀にしとどの血を吸わせ、息を荒げて。きっと喉も渇いているはずよ。

開閉が止む

善　　そうだ、ふふふ、いつだったか言った、あの言葉を言ってあげましょ。

障子がゆっくりと開いていく

善　　疲れたでしょ？ 喉が渇いたでしょう？ ちょうどいいわ。

障子がある程度開き、奥にいる人間が見える
そこには刀を気だるそうに持った田前が、立つのもやっとといった様子で善を睨んでいる。善を開ききった瞳孔で見据えながら、ゆっくりと刀を振り上げる

善　　お口直しにおひとついかが？

善の頭上に振り下ろされようとしたところで暗転

【しまい】